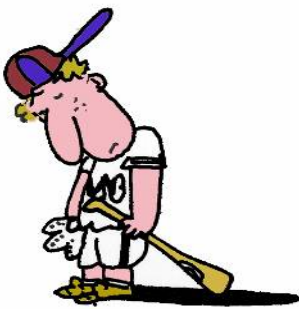


ています。歌と芝居と講義で怒りのコントロール方法を学んでもらいます。この対人援助学マガジンを讀まれて家族塾に興味を持っていただいた方や、家族療法、家族造形法に興味がおありの方には是非来ていただきたいです。もちろん私はシンガーソングカウンセラーなので歌のライブもあります。詳細はHPもしくは「古川秀明」で検索をご覧くださいませ。当日「対人援助学マガジンを見て来ました」という方がおられたら、すごい幸せです。

大川 聡子

前回のマガジンで掲載した、イギリスはブライトンでの話。ペンションを日本からインターネットで予約したのですが、到着したら、玄関に携帯番号が書いてあるだけで無人。私はイギリスで使える携帯電話を持っておらず、もうすぐ日も暮れそう。一人途方にくれながら、石畳のバス通りを大きなスーツケースを転がして、電話ボックスを探していました。すると路面のパブでご夫婦で飲んでいた男性が声をかけてくれました。顛末を話すと、自分の携帯電話でペンションのオーナーに連絡を取ってくれ、オーナーはすぐに戻るとのことでした。お礼を言うとお礼はいりません。あなたがもし自分の国に帰った時に、慣れない国で困っている外国人がいたら、助けてあげたらいいですよもう6年前の話ですが、忘れられない一言です。



浅田 英輔

第3回目の電腦援助。始めたときは「3ヶ月に1回なんてラクショーっすよ！」と書いていましたが、結構たいへんですねこれは。それでも「こうしたほうがわかりやすいかな？」と考えながら書いております。

今年の春は寒くて、弘前城の桜も咲きることなく散って行きました。散るときに桜吹雪、その後はピンク色のじゅうたんが見られるのですが、今年はそれも寂しいものでした。毎年の桜を楽しみにしていた自分にも気づきました。弘前城にはまだ桜があります。枝垂れ桜もきれいですよ。

大谷 多加志

昨年度は私にとって、いろいろと新しいことがスタートした年でした。このマガジンもその1つです。それで、今年度はとらえず現状維持でいこうと勝手に考えていたのですが、どうもそうはいかない事態があちこち起こってきました。

その1つが、家族のこと。数年前から少しずつ動いていたことが、家族の生活の場を変えるという形で節目を迎えました。家族全員がよかったねと笑い合えるような着地点ではなく、それぞれに葛藤を抱え、実際に衝突もしながら不時着同然でとにかく降り立ったというのが現状です。もともと、感情が大きく揺れ動く場面は苦手です。避けて通れるなら通りたいというのが本音でした。この先、事態がよい方向で進むかどうかはわかりませんが、ここは退けないところだと心を決め、きちんと向き合って臨めたことだけは、よかったと思っています。そうした気持ちを根っこで支えてくれたのは、このマガジンでも書かれている、さまざまな人、家族の物語です。いろいろな形で、つながりを持ってくれた方、影響を与えてくれた方たちに、感謝です。

岡田 隆介

「予告編」

「ウツは心の風邪」とか「お父さん、眠れる？もしかしてウツ？」みたいな底の浅いコピーのせいか、最近、やたらとウツだろうかと聞かれる。仮にも精神科医なので、長嶋さん風に「ん～、どうなんでしょう」とも言えず、ストライクゾーン(枠)をいっぱい使ってボールを投げる。すると、

① 相手の期待通りウツに否定的な返答をしたなら、おざなり感に軽く失望している感じがした。

「オレ、ウツかなあ」
「最近、そう思っている人、多いみたいね」
「仕事に意欲がわかないし、それに眠れないんだ」
「そう？そんなふうには見えないけど」
←期待に添ったので、一応ホツとしている
「でも、そうなんだ」
「大丈夫、疲れてるだけだよ」
←でも、納得はしていない様子
「そうかなあ…」
② 相手の予想通りウツに肯定的な返答をしたなら、分かってもらえたと安堵しつつも不安は高まった。
「オレ、ウツかなあ？」
「どうかしたの、話してみて」
←期待に添ったので、一応ホツとしている
「気持ちかどんよりしてね。それに、メシもうまくないし」
「仕事はどう？うまくいってるの」
←話したいような話したくないような感じ
「どうかな…」
「ウツかもしれないという不安がさらにウツを呼び込むんだね」
←共感より助言が欲しそう
「そう…」
③ ウツへの予想外の肯定的返答をしたなら、驚きと好奇心から表情が変わった。
「オレ、ウツかなあ？」
「どうかしたの？」
「なんだか気分が晴れなくて。それに眠れた感じがしないんだ」
「体調はどうなの？」
←話が逸れてちよっと戸惑う
「かなり前からよくないみたい」
「身体の悲鳴に耳を貸さないから、心が警報を出してるんだよ」
←腑に落ちた様子
「そういうことか」
④ ウツへの意外な否定的返答をしたなら、スレ違い感はあるけど腹は立てない
「オレ、ウツかなあ？」
「どうして？」
「仕事がつまらなくて、それにメシもマズイ」
「酒はまずい？釣りをする気も起きないの？」

←話が逸れてちょっと戸惑う

「いや、以前ほどじゃないけど、そこそこや
ってる」

「だったら仕事の意欲は年のせい、メシは
ヨメさんのせいでしょ」

←臆み合わなさがかえっていい感じ

「そういうことか!？」

続きは対人援助マガジンで、いつの日
か…。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

今日(5月25日)は、インドカレーを作る
ための下ごしらえをしていました。玉葱2
キロを炒めました。玉葱が飴色になる
頃には、腕が上がりなくなってきました。
明日は、ラムカレーを作るつもりです。明
日の夜に、キッズサンガ(子供会)と婦人会
の役員の方の会議にラムカレーを試食して
もらうつもりです。今年の夏にキッズサンガ
のイベントで出すメニューにラムカレーを
出せるかどうか検討してもらうのです。キ
ッズサンガをするのに会費を徴収して
だけではなく、イベントで活動資金を稼ごう
という趣旨でこんな話しになりました。

■お寺で、子供会？婦人会？と思われ
るかもしれませんが、ずいぶん昔から存
在する団体です。婦人会は江戸時代には
ありました。私たちのお寺では最勝講と呼
んだようです。映画『カレンダーガール』も
教会の婦人会の話でした。楽しい映画
でした。

■最近、お寺の世話役の気質が急速
に変わってきています。行政官と比べると、
分かりやすい気がします。かつては共に
権威を背にしていました。今時のお寺の
世話役は、一般の人と同じ方向に向かっ
て手を合わせています。急速に権威主義
からの脱却が進行しています。テレビ画
面を通して見る行政官が権威を保とうと
していることに無理があるし、私たちはその
愚かしさを眺められるようになりました。。

川崎 二三彦

いよいよ破綻？

退職を前に「有り余っている有給休暇を

少しは使いたいな」という連れあいの希望
を満たすため、今年2月に宮崎旅行に出
かけたことは前号で報告した。これで何と
か義務を果たしたと思っていたら、そうは
問屋が卸さない。

「退職記念の慰労旅行に行きたいわ」
などと言いつす。

「この前、宮崎に行ったところじゃない
か」

「私は40年も働いたのよ。せめて海外に
行きたいの。イタリアなんてどうかしら」

ウウム、宮崎2泊でごまかすわけにはい
かないか、と観念してはみたものの、こっ
ちはまだ現役で仕事しているのだから簡
単には休めない。でもイタリアならば、今
年がヴェルディ生誕二百年になっていて、
あちこちでヴェルディのオペラをやっている。
カレンダーをにらんで、ここしかないとい
う5日間の日程を空けることにした。そ
して……



「決まったぜ、ベトナムだ」

「ええっ、イタリアじゃないの？」

「旅行会社に聞いたら、5日間でヨーロッ
パ旅行は無理だし、もったいないってさ」

「だったら、2~3日延ばせばいいだけの
ことでしょ」

「うるさい。そりゃ、アンタはいいぜ、退職
して自由気ままに暮らせるからな。こっ
ちはそれができないから苦労してんだ」

などと言いつながら、出かけたベトナム。
珍道中の詳細は省略して、写真を何枚か
貼り付けるにとどめたい。



ところで、今回の旅行が宮崎旅行と違
ったのは、帰国後、連れあいが京都に戻
らず、そのまま何日か、横浜で単身赴任
している私のアパートに滞在したことだ。
何かと助かることは多かったのだけれど、
一方で、食器や洗濯物を片付ける場所が
違う、部屋が狭くて居場所がない、見なく
ていいところを覗いている、等々の不都合
さがそこかしこに出現する。それやこれや
で、連れあいが京都に戻ると、いつもの落
ち着いた生活が始まり、なぜかほっとし
たのであった。こんなことで、果たしてよい？
(2013/05/27記)

鶴谷 圭一

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

20年前に香港のオイスカ日本語幼稚園
での同僚がタイのバンコクにある現地
の幼稚園に勤務して18年、日本人部の
園長になっている。年度末に園児の父親
が会社ごとタイに転勤になり、一家で赴任
し、元同僚の勤務する幼稚園に転園した。
そんな縁もあってタイ事情を聞くと「日本
人の先生が確保できない！」との悩みを
聞いた。幼稚園教諭の免許は3種類あ
って、短大卒の2種と四大卒の1種、そ
して修士の学位を有する専修免許状だが、
タイ国の就労ビザの条件が厳しくなっ
てきて1種以上でないといビザがおりないとい
う話だ。

そこで、知り合いに話したところ、大
学生で興味のある学生がタイの幼稚園
で見学や実習を行うというルートが
できそうな雰囲気…まだ雰囲気ですが、
興味のある教員養成機関の方、学生
の方、よろしかったらご協力を！

河岸 由里子

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主筆

我が家の犬は4月で15歳になった。後ろ足が弱ってきて、雄独特の片足上げのポーズが取れなくなった。耳も遠くなり後ろから近付いても気づかない。おやつにも以前より執着が出たようだ。しかし、年をとっても変わらないことがある。臆病なことと雨に濡れるのが嫌いな事。北海道の冬は厳しいので今年は車庫に住まわせた。車庫の中は濡れることもなく快適だったようで、外に行きたがらない。暖かくなったのでそろそろ外の犬小屋に戻そうと思い、雨が降っても濡れないように糞子の一部に敷き詰めてあげた。嫌がるかと思ったら意外と気に入ってくれたようだ。お気に入りのマットも敷いてあげたからかもしれないが、さわやかな風に撫でられ伸び伸びと寝そべっていた。

中村 周平

事故後、初めて「褥瘡^{じよくそう}」というトラブルに見舞われました。これは、体の同じ箇所^{じよこ}に圧力が掛かることで血流が悪くなり、その箇所の細胞が壊死する二次障がいです。最悪の場合、患部からの感染で死に至るケースもあります。自身の場合、幸いにも発見が早く、大事には至りませんでした。車いすに座ると患部に圧が掛かってしまうため、2週間ほどベッド上で寝たきりに生活でした。またそれ以外にも、これまで無かったトラブルがちらほらと…

事故から10年が経ち、確実に自身の体に変化が起きているのではないかと思います。自分が頑張りたいと思った時に頑張れる「今」という時間を大切にしたい、と感じています。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、府教委認定フリースクール「知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

「原稿が届いてませんが…」そんなメールが団さんから届きました。「あれ、原稿の締め切りは6/15のはずでは…？」そう思って、原稿締め切りの連絡メールを確認したところ、それはマガジンの発行日。結構焦りました。そんなわけで、今回はドタバタの中で仕上げました。次回はそんなことのないように、気をつけようっと…。



荒木 晃子

私事であるが、母は、かつて長年会計事務所に勤めていた(今でいう)キャリアレディ。スーツ姿が、それはそれは素敵だった。月末や年度末など、残業があつて帰りが夜遅くなると、父は近くの駅までよく母を迎えに行っていたことを覚えている。その頃は、現在のように携帯やスマホのない時代だったので、母が事務所を出る前にかけてくる電話の受話器を耳に当てたまま父は電車の時刻表を眺め、しばらくすると、決まって「ちゃんと戸締りをしていなさい」と告げ、駅まで母を迎えに出かける。しばらくすると、両親そろって「ただいま～」と帰宅するのだ。両親が共働きだと、毎日学校から帰宅しても、「おかえり」と言ってくれる人はいなかった。でも、「ただいま」も「おかえり」も大好きな言葉だったので、返事はなくても、毎日「ただいま～！！」と大きな声をあげながら玄関のかぎを開けていた。きっと、誰もいない家に入るのが怖かったのだろう。あのころ、私はまだ小学生だったから。むかしむかしにあった、小さな家族のアルバムの1ページ。あたりまえの日常の光景は、時を経た今、セピア色の光を放っている。

そういえば、毎年5月の「母の日」には、娘の私が精いっぱい母親孝行をするのが恒例だった。朝早起きしてお味噌汁を

作り、朝食の後片付けをして学校に行く。その日はなぜか、しっかりせねば！という自覚からか(どうかはわからないが)、学校でも物事をてきぱきとこなし、授業が終わると、友達の誘惑をしり目にそそくさと家にもどり、前もって母に確認していた「母の日に食べたい夕ごはん」をつくるため、父から預かったお財布を抱え、近くの商店街へ走る。急ぎ買い物を済ませると、また走って家にもどり、お料理を作り始める。そう、母のために夕食をつくるのは私で、父はスポンサーだ。普段はワーカホリックだった父も、さすがにその日だけは早めに帰宅し、帰り道に母のためにケーキを買って帰るという連携プレイで一緒に母の帰りを待ったものだ。

その昔、小さな家族がつくった「母の日」の思い出。食卓には、少し焦げかけたサバの煮つけと、どう見てもおいしそうに見えない肉じゃが。そして、未熟な包丁づかいで切った沢庵は、ひとつつまむと、ぱらぱらといくつもつながっていた。そんな光景をうれしそうに眺める母の横では、陽気な父が普段よりひととき大きな声で「おいしい！おいしい！」といいながらご飯をほおぼっていたな。

今年の「母の日」には、亡き父と二人分の感謝をこめて、病院のベットサイドに真っ赤なカーネーションを飾ろう。もちろん、生花は持ち込めないけれど、造花のカーネーションだって、アレンジしてかわいいボックスに入れ、小さなぬいぐるみを添えてラッピングしリボンもかけた。小さな家族の光り輝く思い出のひとつコマが、今年ももうひとつ増えそう。感謝感謝。

尾上 明代

「加齢に伴う肩部の支障から、腱鞘炎様状態をおこし、執筆不能につき休載」とお知らせがありました。

木村 晃子

マガジン編集長である、団先生の家族理解ワークショップの一日目に参加した。札幌で年2回行われているこのワークショップは、もう10年以上も続いているようだ。

私は、平成20年の4月に初参加以来、6年目に突入。

テンポの良い語り口に、私たち「家族」の日常に起こるあれこれと、その周辺、世の中で起こっていることが、一見関係ないように見えて、様々なつながりがあることを改めて知る。自分の身に起こっていることと、世の中で騒がれていることが「関係ない。」ではないのだ。人が歩む時間の中で作られ、維持されているシステム。破たんするシステム。その影響を受けながら営む家族。

「家族」というコンテンツはどんな世界にもリンクしていける、まさに実感。学び方を学ぶこの貴重な時間にとても幸福を感じるのだ。

ところどころに笑いがこぼれながら、テンポの良いオープニングトークから、6時間を構成する各セッション。ふと気がついた。そこに、いわゆる「専門用語」はほとんど含まれていない。私たちの生活場で発生している、「日常言葉」で、人を理解するあれこれの視点。団先生の学びが、自分の実践現場にすぐに取り入れることができるのは、これが大きなことだな、と思った。「専門用語」が羅列されると、なんだか、格好の良い学びをしているように感じる。専門家の顔をしてわかったような気になる。でも、それは、限られた世界の限られた人にしか通用しないことだと思う。これ以上の不親切はあるだろうか。

「今いる人が、今いる場所で、自分たちで、自分たちの問題を乗り越えていけるように。」支援していくことは、来談者という「自分たちには何らかの課題があつてなんとかしたい。」と思っている人たちの日常にリンクしていかなければできないだろう。そこに必要なのは「専門用語」ではなく「日常言葉」なのだ。

脱！偽専門家。ホンモノを目指したい、そう感じながら、ワークショップ二日目の朝を迎えつつ・・・

団 遊

「お仕事内容」を聞かれたときに、「社会問題を創造的に解決する仕事をしています」と言ってきた。これが分かりにくいとも

つぱらの評判だった。

その結果、「団は何をやっているかわからない」という評価に落ち着き、そしてまた時間をおいて、「何をやっているのか？」と聞かれ続けてきた。

その意味のないスパイラルから抜け出すべく、「何をしているのか？」を一覧にしたサイトを作ってみました。よかつたらぜひご覧ください。

www.danasobu.com



藤 信子

5月12日、日本集団精神療学会の「東日本大震災関係者相互支援グループ」のために、仙台に行った。終了後、地元の美味しい居酒屋探しが生きがい、という友人と飲んだ。ほやを頼んだら、震災以来初めてとれたものと出され、ほやは育つのに時間がかかるので、津波でさらわれてしまっ以来、やっとなることができるようになったのだと聞いた。ほっき貝や沢がになどいろいろ地元の味を楽しんで帰る時に、ご主人が私たち3人が東京と京都から来たこと知り、最後に「また来てください」と言われた。それはお店としては単なる挨拶かも知れないが、仙台や盛岡に行つてそう言われると、商売だけでなくそのように思われているのかと感じる時がある。震災以後、相互支援グループを実施している中で、「本当に来てもらつてうれしい」ということと、もう一つは今年になって「他の地方は東北のことをまだ報道していますか？」という、忘れられることへの不安を聞くようになった。復興ということを取り立てるマスメディアが腹立たしい、という人もいる。声を聴く、感じたことを伝えるコンダクターの役を、細々としばらく続

けなければとまた思っている。

水野 スウ

「いしかわ家族面接を学ぶ会」がはじまって今年で10年。ということは、マガジン編集長・団さんも、石川に通い続けて10年。団さんと出会って、私も10年。5月の勉強会には参加者50人のうち、4割がはじめての人たち。その中に紅茶の時間つながりの人たちが何人もいました。

考えたら団さんはずっとくりかえし、同じこと言ってる気がする。生きてるかぎり、問題も心配もなくなる。解決しようって目標が、そもそも違うんだ。どこから手をつければちょっとでも変わるかな、を考える。「変化」はとても大きなこと。変わらないところを見るのではなく、変わつてるところに焦点あてることだよ——そのことを、手を変え品を変え、ずっと伝えてくれている。

切れ味鋭い弾丸トークにははじめはビビった私だったけど、学び続けるっておもしろい。何十連発、時には集中豪雨の言葉の中から、私にとって役に立つ言葉のエッセンスやスキルを素早くキャッチするすべも、今じゃだいぶ身についたぞ。

第一回目の勉強会の時に、打ち上げ花火じゃなくて長く続けること、そして対人援助にかかわるいろんな分野の人同士のネットワークを地域でつくっていくことが、この会の目的、って言つてらしたけど、その目的に近いことが、県内外のあちこちで今、本当に起きてます。

一人で孤軍奮闘しない、させないシステムづくり。職場でジェノグラムを使うのがみなさんの当たり前になってきてる、なんて話も聞いて、会を十年続けて来たことの変化、成果を感じました。私自身も、紅茶つながりの誰かれも、団さんネットにこれまで何度も助けてもらってきたから、なおそう思えます。

石川の団さんの会10年、私がクッキングハウスと出逢つて15年、紅茶の時間を続けてきて30年、この3つはどれもが私にとっての大切な学校です。

このマガジン連載も、ある意味で私の自主学校。ここを、自分の文章の直播き用畑にさせてもらい、それを手がかりに書き

直し、削り、書き足して、一冊の本をつくら
ることができたのだと思っています。

自著紹介

『紅茶なきもちへコミュニケーションを巡る
物語』著:水野スウ 発行:mai works 四
六版 200P ¥1,200(税込)

一般書店の取り扱いはありません。送
料一冊160円。お問い合わせはこちらまで。
sue-miz@nifty.com

山本 菜穂子

本庁に行き1年でしたが、様々事情
があり、私は児童相談所に戻ってきました。

昨年度、10年前に所属していた課に再
度勤務してみて実感したことがあります。
私自身の変化です。

私はほほえみを始める前に比べたら、
怖いものが少なくなりました。ほほえみ
ながらコミュニケーションがとれると、こちら
の真意も伝わりやすくなり、相手も早くこ
ろを開いてくれる気がします。

それから、誰のために何をするのかの
感覚がぶれなくなりました。これもほほえ
みの活動を継続してきて私の中に定着し
てきたものの気がします。

もうひとつ、「たいへんだな～」と思うこ
とが起きて、その陰にあるチャンスや前
向きな意味づけを見つけることが上手に
なっていることに気がつきました。これも、
ほほえみの7か条の定着によるものでし
ょう。継続は力なり！ですね。

さあ、この連載を今回で閉じようと思
います。私たちのほほえみのチャレンジは
まだまだ続きます。また、お目にかかる日
まで。皆さんもどうぞ、寄り添ってほほえ
むことから始めてみてください。

早樫 一男

60歳を超えると体力の変化は当然で
すが、母親の介護問題、子どもの自立と
夫婦だけの時間の増加、新たな家族(孫)
の誕生などに直面しています。
「家族のライフサイクル」では終盤と言
える時期であり、これまで学んできたこ
とを実感として味わうことになっている
とも言っても良いかもしれません。

また、結婚して30余年、いろいろあり
ながら、家族の発達段階の各ステージや節
目をそれなりに順調？に、乗り越えられ
てきたことに、改めて、感謝している昨
今です。

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職
の養成にたずさわっています。

春から仕事の担当が替わり、このと
ころ壁にぶつかりつつのたうちまわる日
々をすごしています。そんな中、「ここは
こうした方がいいんじゃないか」とアドバ
イスくださる方、「ちょっとやり方がおか
しいよ」と注意してくださる方、「どない
したんや」と一緒に考えてくださる方
のなんと多いことか。周囲の人々には、
本当に感謝の一言です。

「今のあなたは、こんなことが出来
ない。」と言われると昔はずいぶん落ち
込みました。しかしそのメッセージと共
に、「だから、具体的にどうしていこうか。」
と言われると、こんなに勇気が出るのか
、と再認識します。

とにかく、具体的に、実践的に、誠
実に動く。作戦を練る一方で、直感を
大切に。それからしっかりご飯を食
べて、お風呂に入って、早寝早起き！
と自らに言い聞かせる日々です。



中島 弘美

ピヨピヨ、ピヨピヨ——鳥の鳴き声
がするのは JR 大阪駅。

もちろん野鳥の鳴き声ではなく、ス
ピーカーから流れている音。いつごろか
らか、駅構内で小鳥の鳴き声を耳にす
るようになった。私が利用する大阪環
状線の駅で

は、さえずりの種類が違うようで、
ピヨロロロ～ピヨロロロ～と流れるよ
うな鳴き声で勢いが良い。きっといく
つかのパターンが用意されているのだ
ろう。

おおぜいの人々が行き交う場所
で、このさえずりをきくと、ほんの少
しさわやかな気持ちをする。少なく
ともわたしにはこちよい音だ。暑い
ときに聞いていると、スーッとす
て、涼しいような気もしてくる。

子どものころから、たて笛(リコー
ダー)が大好きでよく吹いていた。笛
はもともと小鳥の鳴き声をまねて
作られた楽器。そのため、小鳥に
まつわる曲も多い。キンキンする
ような甲高い音がちょっと耳触り
だと感じる人もいないが、本来リ
コーダーは、木でつくられていて
柔らかい澄みきった音がする。

最近、気に入っているBGMとい
うと、川のせせらぎ音と小鳥の
さえずりだ。人里離れた山のなか
の自然音を聞いていると、鳥が
のびのびとおしゃべりしている。

やっぱりリコーダーより鳥の鳴
き声のほうがかなり上手！

千葉 晃央

ミニ連載:

■私がしている文章の書き方 2 ■

先日、本物の編集の方にお会い
しました。いろんな基礎的なことを
教えてくださいました。この短
信では私がしている文章の書き
方はどんな手順なのかをまとめて
みる試みです。刻々とやり方は
かわりませんが、自分への確認
ですと始めたのが前回。恥ずか
しくなりませんがアマナリの工
夫もビギナーには逆にお役に
たてるかも。

大きな6手順

- ①簡条書きでいいことをかく
 - ②丁寧に膨らませて文章にする
 - ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを
考える
 - ④接続詞等、つながるように加筆
 - ⑤ですます、であるの判断
 - ⑥音読で確認
 - ⑦黙読でも確認
- 今回は「②丁寧に膨らませて文章にする」

手順①で箇条書きしたものに肉付けをしていきます。特に専門用語は気をつけます。読者にわかるように説明を加えます。前提になる法律、定義、諸説の説明など丁寧にしないとイケません。この時は前後のつながりはさわりません。それよりも言いたいことを読者がわかるように文章をつくります。いつも団先生にもアドバイスをいただいているのは、短文にすること。長い文章は複雑になるためです。

それでも、私の文章は独特のようです。勢い？があるそうです。主語述語がおかしいところもあるかもですね。十数年前に私の論文指導をしてくださった団士郎先生、中村正先生、村本先生には「日本語がぐちゃぐちゃ！」とよく指摘されました。そんな過去もあります(笑)。今も自分が大きく変わったとは思っていませんが。

今回は③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える！です！

三野 宏治

今秋、前任校のある秋田県大館市に旅行することになりました。なぜそこに行こうと思ったのか。理由は二つです。息子(長男)にかつて暮らしたところを見せたいと思ったことが一つ。(長男は全く覚えていないのです)ただこの理由は、あとで付け加えた感じが自分自身でもしています。

もう一つのが大館まで旅行のきっかけであり最大の理由です。今年の冬、秋田に出張しました。そのことを facebook に書いたところ、前任校でゼミを担当した教え子から「大館には来ないのですか」と書き込みがありました。その時、「そのうち行きます」とか「機会があったら」などと書くのがなぜか嫌で、「行きます。そうですね。夏か秋に行きます」と書きました。そんなに長い期間住んだところではなかったし、その教え子(達)ともそんなに長い付き合いではなかったのですが、どうしてか「社交辞令で済ましてはいけない」と思いそんなことを書いていました。

日程が決まり、そのことを facebook を通じて彼女に伝え、元ゼミ生全員に伝えてくれました。そして全員がその日に合わ

せ休みを申請してくれる旨を伝えてくれました。「こんな嬉しいことはない」と素直に思っている今日この頃です。

浦田雅夫

保育士資格取得のための奨学金である就学支援制度がスタートしました。保育士養成校卒業後一定の就労条件があれば返還不要です。社会的養護施設等出身者がこの制度を活用されることを願っています。

中村 正

ちょうど連休の頃。大変だった。朝起きたら突然のめまいだ。世界がぐるぐると、メリーゴーランドのように回る。10秒ほどでおさまった。でもまだ頭のなかには余波が残っている。続いて顔を洗おうとしてかんだらまたぐるぐる。落としたものを拾おうとしたらさらにぐるぐる。実は同僚が同じ事態に陥り様子を聞いたのが一ヶ月程前のこと。もしかしたら同じ病気かも知れないと思い、めまい外来というところで行くろいろ検査。ぐるぐると頭と体を動かしてめまいを再現させる。恐ろしい検査だ。自分に酔っている感覚が続く。ぐるぐるは慣れると快楽にもなりそうだと思うつつ次第になじんでいく。診察の結果は「良性発作性頭位めまい症」。自然に治るタイプのような。しばらく自分でリハビリをということで指導をうける。「あまとと眼球的体操」だ。原因は耳石という微妙な平衡感覚を担う物質が半規管のなかをあるべき場所になくて漂っているということらしい。脳の問題という場合もあるらしいが今回はそうではなかった。脳の問題でそれだけぐるぐる回ると一人で病院には来れないということだった。それ以降、リハビリの成果もあってめまいは少なくなってきた。五十肩で両方の肩が痛い、老眼で近くがよく見えない、飛蚊症で左の目に蚊が三匹ばかり飛んでいる、白髪も多くなった。でも私はアンチ・アンチエイジング。エイジング過程はそんなに悪くない。編集長の団さんは私の10年後だと思ってみている。人のエイジングと重ねて一緒に時を重ねることは面白い。異年齢の友人をたくさん持つこと

は楽しい。もちろん私も若い人からそう見られていると思うときちんと歳を重ねようという気持ちになる。



サトウタツヤ

5日間のイギリス出張(LSEで個性記述法のワークショップに参加)を終えて帰ってきたら、高校・大学の同窓会から会報が来ていた。大学の方を読むと川淵三郎氏が首都大学東京・理事長に就任とのこと。感想は差し控えるが、オリンピック招致と関係あるのか。。。高校の方は、湘南高校土曜講座のお知らせというのがあり、慶應義塾大学教授(教育心理学)・安藤寿康氏、駒沢女子大学教授(化粧文化論)・石田かおり氏、昭和大学医学部教授(精神医学)岩波明氏、が相次いで講演すること。なのに私は呼ばれない…。ついでに、前国際日本文化センター長・片倉もと氏が「International から Transnational へ」という高校生向け授業を行ったという記事もあった。

これからは Trans-nation, Trans-action, Trans-discipline だ、つまり Trans の時代だ！と思っている私にとっては(ついでに Trans を融合と訳そうということは私の主張)、あの片倉先生が母校の先輩だということがわかり誇らしい気持ちになった。ところが！片倉氏は2013年2月に急逝されたとのこと。無念である。合掌。

大野 睦

今年は何かと花の咲くのが早い屋久島ですが、何故か梅雨入りはそれほど早くないようです。ジメジメした日々は辛いですが、海からの暖かい風は恵みの雨に変わ

わかります。庭に咲いている鮮やかな紫陽花を見て梅雨を楽しんで過ごそうと思います。

そして追伸

ついに身体障害者手帳の交付が決まりました。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

坊 隆史

最近ハマっている食べ物がある。それはうどんである。若い頃好きな麺はラーメンだったが今はうどんの魅力にはまっている。どうしてこの美味しさに気づかなかったのだろう。人生を数年損した気分である。私の好みは弾力豊かな讃岐のうどんである。冬は関西風のお出汁で頂くうどんでも身も心も温まる。これからの暑い時期は茹でたての麺を冷水で締めてシャッキリとした歯ごたえのざるうどんや生醤油うどんがたまらない。今の私の小麦消費量はハンパでない。とは言うものの数年前はカレーライスにはまっていた。移り気が多い私であるが、しばらくはうどんに日々の疲れをしてもらおう。うどんさん、いつもありがとう。

松本 健輔

カウンセリングルーム HummingBird 主宰 <http://www.hummingbird-cr.com>

今まで母の日、父の日に関わる文化のない家で生活してきた。その中に、妻が別の文化をいれてきた。「母の日どうする？ 決めたら子どもの写真入れて送っておくよ」と。母の日、母からありがとねと電話があった。なんか嬉しいようなこそばゆいような不思議な感じのする出来事だった。次の父の日。父はどんな反応をするのだろう。

岡崎 正明

家族で休日にドライブをしたときのこと。

天気の良い田舎の快走路。信号も無く、実に気持ちの良い運転だった。ふと見ると、道路脇に濃紺の服を着た男性がひっそりと立っている。「…あつ」と思った次の瞬間、左手に警察車両が1台。そして旗を持った警察官が見えた。止められた一般車も数台。幸いこちらは法定速度を超えてはいなかったの、呼び止められることはなかった。

もちろんルールを破るのはいけないことだし、文句を言う筋合いのものではない。しかし休みの日にこんな交通量の少ない道路で何が起こるといえるのか。交通安全を本気で考えるなら、事故多発帯でやったらどうか。休日勤務の腹いせか？ 何かのノルマがあるのか？ など、つい余計なことを考えてしまう。捕まってもいないのに、なぜそんな風に考えてしまうのだろう。それはきつとこっそり取り締まりをしていて、ルールを少しでも破ったとたんに「見たで一！」と鬼の首取ったようにやられるのがシャクにさわるからだ。

もしあれが違反者だけを対象にするのでなかったらどうか。警察官が法定速度内の車に対しては「いつも安全運転ありがとうございます」の看板を掲げて敬礼するとか。ゆるキャラが子どもに「飛び出し注意」と書いた風船配るとかでもいい。そうしたら「休みなのに大変だね」ぐらいの共感を得られるのに。

やはり失敗した時の罰だけでなく、できた時のプラスの強化子が欲しい。その方が問題解決に効果的だよな…などと考えるのは、職業上のクセだろうか。



牛若 孝治

視覚に障害のない人からすると、視覚に障害のある私の行動様式や日常生活のあり方に対して、ある程度の興味があるのかもしれない。白杖を持って単独で外出したり、音声ソフトを搭載してパソコンを利用しているなど、他の人とは異なる手段で、日常生活を遂行していることが、彼らにとっては「凄い！」と移るのだろう。白杖を携帯して、ましてや雨の日にかさなど持っていようものなら、「凄い！」とか、「たいへんですね！」などと言われるが、それは私にしてみれば日常茶飯事である。

彼らの私に対する「凄い！」という言葉は、彼らにしてみれば純粋に感動して言っているのかもしれないが、私にしてみれば、それがときに哀れみや同情、または単なる誉めそやしにしか聞こえない。そこで私は彼らに言う。「あなたたちは、例えば歩くとき、白杖を持っていないのが常識だとか、音声ソフトをパソコンに搭載しなくても利用できるのが当然だと、どこかで思っているやしないか？ あなたの方が私に対して「凄い！」って言っているのは、例えば英語圏の人が英語でしゃべっているのを見て「凄い！」って言っているのと同じだよ。」

つまり、ある目的達成のためなら、どんな手段でもよい。少々時間がかかろうが、コストがかかろうが、ある目的さえ達成すれば「凄い！」なんていう言葉はどこからも出てこない。結局、「凄い！」なんていう言葉が出てくるということは、ある目的達成のための手段を、自己の価値観を中心に考えて、それを相手に押し付けたり、障害を理由として、何もできないと決め付けて、一方的に感情移入しているだけではないのか。だから私は彼らに言う。「私のやっていることに、いちいち「凄い！」なんて言うな！」

袴田 洋子

。2005年に始めたブログを、削除しました。自分にとっては大きな存在でした。セキララに綴ったブログは多くの方に読んでいた

だきコメントをもらい承認欲求がじんわりと満たされていきました。正直に綴っているからこそ、そのコメントは本当に嬉しくて本当に支えになり自己肯定感が少し生まれました。でも、過去の語りに縛られているかもしれないと最近感じてきて、思い切って今回、ブログを削除しました。ここから何が始まるか、少し楽しみでもあります。

乾 明紀

本文にも書いたが、風邪をこじらせて本来書きたかったことは書けなかった。休載も考え、編集長にメールしたところ、「休載も選択できます。くせになるけどね。」という回答をもらった。休載がくせにならないようにするために書いたのが今回の原稿である。結果的には、これはこれで良い機会になったと編集長に感謝しております。

筆者の勝手な判断で、フレキシブルに新しいテーマにチャレンジできるのもこのマガジンの良いところ(?)だと思いました。



國友 万裕

今年の2月、文字通り、「男は痛い！」という経験をしました。椅子からこけて、左腕粉碎骨折。49歳の誕生日の前日に全身麻酔で手術をし、誕生日の日に退院。誕生日を病院で迎えるとは、生まれて以来のことです。ポジティブに考えるならば、僕にとって生まれ変わりの日になったのかもしれませんが。これからの人生をスタートするための記念すべき日です。

病院の空気は独特です。大抵の人は病院で死ぬわけですが、「こんなところで死にたくねえなあー」と思ったことも確かでした。ある先生が、「人間は病院で生まれ

て、病院で死ぬ。その間の時間は仮退院なんだ」とおっしゃっていました。なるほど、含蓄のある言葉ですよね。ということは、人間たちは皆、仮退院中の病人です。病人同士、仲よく生きていくしかありません。

怪我の後、3カ月が経過しましたが、まだ人差し指にしびれが残っていて、完治には半年くらいかかるとのこと。また金具を左腕に入れているので、それをとるために、夏休みにもう一度、1、2日入院しなくてはなりませんが、「あなたはマッチョになりたいんだから、怪我くらいは勲章だよ」と言ってくれる友達もいます。まあ、マッチョに近づいたと考えて、これを機に、自分の身体と対話していきたいと思います。

脇野千恵

。あと一年と思いながら仕事をしていきます。しかし、教育現場は退職者の再雇用が増えていて、60歳を過ぎてでも担任で頑張っているという人をよく見かけます。最近新規採用も増えているはずなのですが、どうも休職者や〇〇加配要員の代用とか、臨時講師の口は山ほどあるようです。だから、私もまだまだ働く場所はあるということです。しかし、ちょっと昔の時代錯誤的な指導や、昔を懐かしむ教員がたくさんいては、若い人たちは学びようがありません。30代後半から40代にかけての教員人口が極端に少ないため、例えば、おじいちゃん、おばあちゃんが、孫の子育てをするには無理があるのと一緒です。

どの職場もそんな現実があるとすれば、若者は仕事の生きがいを見つけられずに、落ちこぼれていかないか心配です。教育現場のそとで、何かできることはないか考える毎日です。

団 士郎

いわゆるミニコミが好きだった。小学校時代のガリ版印刷。宿直勤務する担任の先生を夜の学校に訪ねて行って、ガリ版切りで遊ばせて貰い、数枚だけ印刷して楽しんでた。残されていた試し刷りが、翌日の職員室で話題になったと聞かされて、ちょっと得意だった。それ以来なんやかやとミニコミづくりは今に至る。

社会人になってからだけを振り返っても、「おしかけマンガ」(はがき青焼きコピーで一コママンガを制作し、毎週100人くらいに郵送していた)、「ぼむ」(漫画家グループの同人誌。本格的な冊子で、年に二冊くらいのペースで三十数号続いた。「四人囃子」(連載「蠅螂の斧」にも登場したが、同僚公務員と発行していたミニコミ雑誌。川崎二三彦くんはこの時も仲間)。そして、「DAN通信」、「仕事場DAN通信」(これは個人ミニコミ紙。郵送スタイルにも凝ったことをして、郵便局ともめたりしたこともある。これが面白いというので、この制作日記を、産経新聞で連載しないかと誘って貰ったのが、新聞に文章を継続して書いた最初だ。

思い出せる範囲はこんな所だが、他にも今や私も現物を持っていないようなものまで、あれこれ楽しんできた。そしてたどり着いたのがこの「対人援助学マガジン」。

「場」としてのマガジンは三年も超えて定着しつつあるから、今度は、コンテンツで更なる飛躍や、新企画、チャレンジを試みたいものだ。

最後に出版告知だが、中央法規出版から7月の新刊として「対人援助職のための家族理解入門～家族の構造理論を活かす～」団士郎著 予価1600円が出る。

あつという間に楽しく読めて、役に立つ本という、大それた目論見を形にした。体質的にそうなので、適当に書いているなあという気もしなくはない。よければ書店で手にとってご覧下さい。WS、講演会などでも販売したいと思います。

もうひとつ！2013年震災復興応援プロジェクトは9月第2週、むつ市図書館のマンガ展からスタートです。9月7日、8日は講座企画もあります。その後、10月多賀城、11月大船渡、12月福島の予定です。詳細は次号マガジンで。

